第49回城戸賞 応募原稿

た
ま
き

「弾切りの一座」

大岡俊彦

【「弾切りの一座」 あらすじ】

剣術を見世物にして、結果、剣術を守った男の話。

明治維新直後の神奈川県。

藩が消滅し、元武士たちは苦しい生活を強いられていた。

剣術道場を営む坂上一家もだ。

ある日坂上は「剣術を相撲のような見世物にできないか」と思いつき、「撃剣興行」を起こし元武士たちを集める。

しかし剣術は動きが速く小さく、素人目には何が起こっているかわかりにくい。「わかりやすい興行」と「正しい剣術」の間で揺れた坂上は、わかりやすい方を選ぶ。「剣は鉄砲より強し！」と、鉄砲の弾をまっふたつに切る奇術で「弾切りの一座」を名乗り、客から大うけ。しかしまじめな長男の弥一郎は猛反対。内部に圧力があるまま興行は続く。

一方、不満武士を集めた西郷隆盛は、明治政府相手に西南戦争をはじめた。シヨウ的な剣に反対する一座の半分はそこに合流。弥一郎も参加したが、次男の弥二郎が代わりにゆく。

戦争は西郷の死で終わる。坂上は弥二郎の死を聞きシヨックで隠居を決めた。長男弥一郎は一座を預かるが、「本物」をやりたいがため防具なしの危険な試合をし、戦の残党たちを集めはじめる。

坂上は、榊原鍵吉と出会う。彼は警察の武術指南役で、撃剣興行で全国を巡回し、まだ見ぬ強者を警官にスカウトしていた。

——武士はどこへ行ったのか？ 消えたわけではない。警官になるのだ。

弥一郎たちの政府転覆計画を止めるため、元武士たちを警官職につけるため、坂上は榊原撃剣会と弾切りの一座の対抗戦を企画する。剣は役に立たないか？ 役に立つ。日本を守るために。家族を一つにするために。

【登場人物表】

坂上覚之進 (36)

元武士。
一刀流坂上派の師範。

坂上弥一郎 (17)

長男。まじめ一本槍。

坂上弥二郎 (15)

次男。自由な性格。

坂上杏 (14)

三女。近代的な価値観を
もつ。

坂上しづ (36)

妻。
薙刀使いで、相撲好き。

十文字 (37)

槍使いで、坂上の盟友。
現在は「十文字そば屋」
の主人。

八染 (60)

やくざで興行師。
全身入れ墨で、遊郭に住
む。

松尾友則 (20)

商人。松尾米問屋の跡取
り。

野末馬之助 (23)

風来坊の元侍。奇抜な夕
イ捨流剣術を使う。

榊原鍵吉 (45)

実在の人物。
直心影流当主で、榊原撃
剣会を主催。

○神奈川県、瓜生神社、撃剣場

どん、ど、どん。
どん、ど、どん。

太鼓隊が勇壮に奏で、法螺貝が鳴る。
神社の境内に敷かれた板張り。

それを囲むように竹の柵。観客たちは
興奮してそれをつかみ、揺らしている。
わっ！と歓声。

剣士たちの列が入ってきた。

剣道風の防具、思い思いの竹刀（長い
ものや短いものや二刀や薙刀）。

先頭の坂上（36）は、朱鞘の日本刀
を頭上に掲げている。

静かに抜刀し、青眼に構える。

目の前には鉄砲を構えるしづ（36）。

観客「……（息をのむ）」

号音（空砲）。刀を切り下げる坂上。

坂上は袖の中から、二つに切れた弾を
こっそり地面に落として拾い、観客に
見せる。刀で弾を切ったように見える。

坂上「見よ！」

観客「うおおおおおおお！」

大砲を構える十文字（37）。

物陰でうなづきあう弥一郎（17）と
弥二郎（15）。起爆スイッチのよう
なものを持っている。

坂上「剣は弾より強し！」

火を吹く大砲（空砲）。

坂上は真っ向上段で切り下す。

弥一郎、弥二郎、タイミングよく起爆。

坂上の左右後方に爆炎がふたつ上がる。
刀で大砲の弾を切ったように見える。

観客「うおおおおおおお！」

十文字「今日の火薬、ちよっと多くない？」

天に刀を掲げる坂上。

坂上「これが武士の剣でござる！」

見物1「よっ！ 弾切り！」

見物2「弾切りのオ！」

どん、どどん。どん、どどん。

坂 上「弾切りの一座、開幕！」

○タイトル『弾切りの一座』

○オープニングシーケンス

剣士たちが撃剣場で試合する。

見た目は剣道っぽいですが、いろいろな古流剣術の、さまざまな技を繰り出す。

審判の坂上が紅白の旗を上げ、観客たちが盛り上がる。

その撃剣興行げきけんこうぎょうを描いた当時の錦絵。

徳川の大政奉還や明治政府誕生を伝える瓦版などがインサート。

T & ナレ『江戸時代は終わった。明治維新で幕藩体制は解体され、武士は平民となり「自力で稼げ」と町に放り出された。その数は三百万人。その武士たちは、一体どこへ消えたのか？』

町を歩く元武士たち。

町人たちに蔑みの目で見られる。

元武士たちの衣服はボロボロで、糸がほつれたままなのを隠す。

○相模原の全景、雪のちらつく朝

T 『明治九年、神奈川県』

○雪の朝、坂上家、母屋と道場

○同、道場内

坂上と弥一郎が、竹刀の組手中。

弥二郎は正座。

坂上と弥一郎は鬘かみを結っているが、弥二郎は元服前で総髪。

ただっ広い道場に、たった3人。

坂上「ダメだ、ダメだダメだダメだ！」

弥一郎「何がですか、父上！」

坂上「ここ！ここも！ここもここもここも！」

も！」

次々と弥一郎の手足を竹刀で指摘。

坂上「いいか、一刀流坂上派の奥義は『剣の後ろに身を隠す』だ。ここもここもはみ出しておるではないか！」

弥一郎「無理です！ 棒一本の後ろにどう身を隠せと？」

坂上、青眼に構える。隙がない。

弥一郎「……」

坂上「剣が己だと思えばよい。自分が一番前に出て、相手にまず真つ先に触る。相手がどう思っているか、相手がどう出るか。剣で触れば分るのだ。だから剣が前で、あと」

弥一郎、真似をして坂上の剣先に触れる。

坂上「(うなづく)……次、弥二郎」

弥二郎は青眼ではなく、斜めに構える。

弥一郎「父上！ 話が違うじゃないですか！」

弥二郎「兄者は兄者の剣。俺は俺の剣だろ」

弥一郎「へ、屁理屈だ！」

坂上「構わん。弥一郎、お前はまっすぐで母上のしづに似た。弥二郎の自由さは、さだめし俺に似たのだな」

弥二郎の剣は動。たくみにフェイントをかけ、横へ回り込むタイプ。しかし攻めは単純で、簡単に坂上に胴を抜かれる。弥二郎、一礼。

坂上「……しかし桂くん、遅いな」

弥二郎「また寝坊だろ」

入口に姿を現す桂少年(8)。

弥一郎「遅いぞ！ 剣に志した者は生活を整え……」

桂少年「(一礼して)あの……今日はそれを辞める、と言いに来ました」

坂上「辞める？」

桂少年「この道場を辞めたいです」

坂上「？ よそへ行くのか」

桂少年「いいえ。剣を辞めるんです。今時、意味ないんで」

坂 上「は？」

桂少年「この新時代に、剣の意味ありますか？」

弥一郎「なんだと！」

○同、庭

庭を挟んで母屋から朝食を運んでくる、

しづと杏（14）。

走り去る桂少年。

杏 「あれ？ どうしたの？」

○同、道場内

神棚に飾られた、朱鞘の大小の太刀。

道場の板間に正座して、家族で朝食。

漬物とみそ汁のみ。飯は麦のおかゆ。

杏が溜息をついて、正座を崩す。

しづ 「杏」

杏 「だって板間でずっと正座は痛いよ！

道場飯はもう嫌！」

しづ 「そんなこと言ってたって、母屋は神保

さんに貸して、そのお家賃でぎりぎりなん

とかなってるんですから」

杏 「つるべ取られてなんとやらじゃない

の！ 最後のお弟子さんも辞めちゃって、

この道場もおしまいよ！」

弥一郎「道場は金を稼ぐ場所ではない。剣を

磨く場だ」

杏 「剣で飯が食べれるの？」

弥二郎「（剣で飯をすくって食べる真似）」

杏 「そういうこと言ってるんじゃないよ

ジロ兄！」

しづ 「政府から士族への支給も、年々減っ

てるじゃない？ 坂上家の二人扶持、来月

から一日七合に減らされそうよ」

杏 「私、十文字さんのところで働きます！

武士の商売が一番成功してるの、十文字さ

んの所のそば屋さんでしょ？ そこで商売

を学びたいの！」

しづ 「武家の娘がはしたない」

杏 「四民平等の世の中よ？ 武士も平民ももうないの！」

坂 上 「剣は役に立つぞ」

杏 「どこが？ 戦は全部鉄砲でしょ？ 刀なんてもう使っていないじゃない！ その戦ももう十年前に終わったし、もっと新聞読んでよ！」

坂 上 「……」

○十文字そば屋、外観

○同、内

繁盛しているそば屋。

大柄の主人、十文字が出迎える。

十文字 「おう！ 坂上の！ そっちは……杏ちゃん？ 大きくなったね！」

杏、ぺこりとお辞儀。

坂 上 「(剣を振る振りをして) まだ、やってるか？」

十文字 「もう、ずいぶんとやっとならん」

坂 上 「なまったか」

十文字 「このそばは全部俺が打ってる。(力こぶを見せて) 衰えてはおらんつもりだ。今日はウチのそばかい？」

坂 上 「いや、実は……」

表の貼り紙。『女給急募、賄付き』

十文字 「……そこまで困っておるのか。分つた。何なら弥一郎と弥二郎どのも雇おう」

坂 上 「それには及ばん。息子たちには剣の時間を取らせたい。傘張りでしのぐさ」

杏 「(十文字に) あの、私、商売を勉強したいんです！」

十文字 「そうか。俺も最初は大変だった。ここに入り婿しなければ、偉そうな『武士の商売』のままだったろうな。坂上、お主もここで働くか？」

坂 上 「荷下ろしの仕事だ、横浜であると聞いた」

○横浜の港

積み荷の荷下ろし、大八車を引く仕事。肩にずしりと重く、落としそうに。

監督 「刀より重いもの持ったことねえんだろ！ だから侍は使えねえんだよ！」

大八車を小石に乗り上げひっくり返してしまい、また叱られる。

坂上 「すみません……すみません……」
鬻はばらけ、汗まみれに。

○飯休憩

支給された握り飯にありつけた。
一口だけ食べ、残りは懐に。

○夜、坂上家、道場飯

坂上は懐から握り飯を出す。

坂上 「昼飯の残りだ」

弥二郎 「握り飯だー！」

弥二郎、弥一郎、がつつく。

坂上 「……（微笑む）」

○次の日、横浜の港

再び重労働をする坂上。

飯休憩で同じく握り飯を一口かじり、あとは懐に入れる。

隣に座った、鬻の男榊原（45）。

榊原 「お互い、大変ですな」

坂上 「鬻を見て）お主も、武士でござるか」

榊原 「榊原鍵吉と申す」

坂上 「榊原？ ……幕府講武所（こうぶしょ）の剣術師範、直新影流（じきしんかげりゅう）の榊原殿か！」

思わず立ち上がる坂上。いさめる榊原。

榊原 「まあまあまあ。大袈裟でござる」

坂上 「（座り直して）そんな大物が……失礼ながらなんでこんな所に？」

榊原 「港は、払いが良いのでな」

坂上「……申し遅れました。拙者、坂上覚之進。一刀流坂上派の小さな道場をやっております」

榊原「一刀流……坂上派」

坂上「田舎流派でござる。しかし名門道場のご当主ですら、人夫とは」

榊原「それが明治時代というらしい」

坂上「……間違つてるとは思わんでござるか？」

榊原「ふむ。……まあ、しのぐしかないのではなからうか」

坂上「しのぐ？ いつまで？」

榊原「分らぬ。私は侍として生まれたし、侍として死にたいが」

坂上の手が擦り傷だらけなのに気づいて、榊原は、懐から貝に入った膏薬を。

榊原「刀と車は握り方が違うでな。擦り込めばましになる」

坂上「かたじけない」

○坂上道場、春

坂上、弥一郎、弥二郎が稽古中。

十文字が駆けつける。

十文字「坂上の、見たか！ お触れを！」

○市中

満開の桜。その下の立て札を見る人々。

立て札『大礼服並軍人警察官吏等制服着用の

他、帯刀禁止の件 明治九年三月二十八日

太政官布告』

『帯刀禁止』のアップ。

坂上「帯刀……禁止……」

十文字「断髪せよ。俸禄は年々減らす。藩は解体、仕事は各自で探せ。そしてついに、武士の魂までも取りあげるか」

坂上「……」

腰に差した大小の刀に思わず触れる。

駆け付けた若い士族が叫ぶ。

士族「なんだ一体どういことなんだ！」
坂上「うん。多分、こういうことだ」

帯を緩め、腰の大小を抜く。
帯がハラリと落ち、ふんどしがあらわになる。

士族たち「……」

同じことをする。

立て札の周りに、はだけた着物とふんどし姿の、丸裸の者ばかりになる。

桜の花びらが、静かに散っている。

坂上「……」

天を仰いで、泣いている者も。

T 『廃刀令 明治九年三月』

○十文字そば屋、内

洋装の男、松尾（20）が、部下を引き連れてやってくる。

杏「いらっしやいませ！」

松尾「そばを人数分くれ」

杏「……油あげか玉子はつけますか？」

松尾「？ 何故そう思った」

杏「お客様疲れてらっしやるように見えたので、精のつくものを、と思ひまして」

松尾「この店の教えか？」

杏「いえ。私がそう思っただけで」

松尾「名は、なんと申す」

杏「ここは十文字そば屋です！」

松尾「違う違う（笑）。そなたの名だ」

杏「？」

松尾「お主、商売の才があると見た」

杏「才？」

松尾「人を見る目だ」

× × ×

別の日。

松尾「杏はおるか！」

杏「いらっしやいませ！」

× × ×

別の日。

松尾「杏はおるか！」

杏 「いらっしやいませ！ 松尾さん！」

松尾 「今日は米相場について教えに来た」

杏 「ありがとうございます！」

資料を見せ、向かいに座れ、と松尾。
座る杏。

○坂上家、道場内、朝食

杏 「……父上、御報告があります」

坂上 「なんだ」

杏 「私、祝言を上げたい人ができました」

弥一郎、弥二郎、みそ汁を吹く。

坂上、しづの顔を伺う。

知らなかったと首を振るしづ。

杏 「十文字そば屋に通ってくれている松尾友則さんです。最初はお金の勉強をさせてと頼んだら、快く教えてくれました。それで分かったの。お金って相場で変わるのよ。松尾さんは困ってる人には米を安く買って、偉そうな侍からはお金を高く取るの。松尾相場って言われている。お金は、相場の上げ下げで儲けるの」

坂上 「何者だ、その男は」

杏 「東京の、松尾米問屋の跡取りです。

神奈川支店に今はいて、東京にもうすぐ戻るんですって。私もついていきたいのです」

坂上 「平民ではないか。武士の娘は、武士と結婚しなさい」

杏 「それは古い時代の価値観でしょ？」

坂上 「いかん。武士には武士の……」

杏 「もう武士の世の中じゃないのに、どうして父上もイチ兄もジロ兄も分らないの？ どうして刀を振って、ちょんまげ結ってるの？ どうして松尾さんと夫婦にならないの？」

弥一郎 「明治政府などというものは、たかが薩長土肥の集合体。まだ、武士の世に戻せる」

弥二郎 「兄者」

杏 「……」

杏、立ち上がる。お辞儀。

杏 「私、駆け落ちします。今までお世話になりました」

坂上 「駆け落ち、って、もっと黙ってやるものだろ」

杏 「私の食べる分がなくなるから、お兄たちは腹いっぱい食べられるわよ！ いい口減らしでしょ！」

杏、駆け出す。

しづ、追う。弥二郎も追う。

弥一郎を止める坂上。

坂上 「杏は、こうと決めたら譲らん。お前と同様、母上のしづに似た」

弥一郎 「しかし……」

坂上 「……」

○坂上家、道場内、夜

一人で裁縫する坂上。

刀を持ち歩く袋を縫い、うなづく。

○市中

巡査と、若い侍の野末（23）が、立て札の前でもめている。

野末 「なんでだよ！ 貴様無礼だぞ！」

巡査 「士族と言えども帯刀は禁止だ！ その札を読め！」

野末 「刀を捨てろだと？」

野末は腰の刀を抜こうとする。

その手を止める坂上。

坂上 「お若い。『帯刀は禁止』というわけだから、『腰に差しちやいかん』というだけだぞ？」

坂上は、袋に入っている刀を見せる。

坂上 「持って歩くならば法に触れぬ。なあ、

巡査殿？」

巡査 「むっ。帯……刀……ではない」

坂上 「ふふふ」

野末、腰から刀を抜き、両肩に担ぐ。

坂上「そうそう。野武士みたいで格好いな！」

野末「ふん」

満足して歩き出す野末。

そこへ、手紙を持ったしづが。

しづ「御前様、御前様！」

坂上「ご機嫌だなしづ。何かあったか？」

しづ「杏から文が届きましたよ！」

坂上「なんと！」

しづ「(読む) 父上、母上、勘当同然で飛び出してごめんなさい。でも私は元気です。詳しくは報告しますが、私の考えで、今月の稼ぎが、なんと倍になりました！」

坂上「(覗き込んで) 元気な字だ。元気そうじゃないか」

しづ「怒ってらしたのではなくて？」

坂上「あの時怒っただけだ。今はそうではない。私の大事な娘だぞ？ いつか松尾殿とも会わねば」

しづ「あ、あとこれも！」

錦絵の刷られた、相撲のチラシ。

しづ「お相撲よお相撲！ 来週巡業がやってくるの！」

坂上「しづは歌舞伎より相撲が好きだのう」

しづ「当たり前ですよ！ 歌舞伎はお話が決まってるでしょう？ お相撲は立ち合ってみるまで、どっちが勝つか分らないのよ！」

坂上「しづは勝負ごとが好きか」

しづ「武家の娘ですもの！ ……でも木戸銭が払えないわね……遠くから音だけでも聞けないかしら……」

チラシを手に取り、眺める坂上。

坂上「あっ」

しづ「どうされました？」

坂上「…ああああああ！」

○夜、十文字そば屋の前

タンポつきの槍を振り回し、構える十

文字。青眼に木刀を構える坂上。

十文字「じゃあ、試してもらおうか」

二、三合あって離れる。

攻めこもうとする坂上の右脛を、十文字の槍が払い、寸止め。

坂上「むっ」

十文字「昔からそうだ。足元がお留守だぞ」

坂上「足元を固めろ、人生のようにか」

十文字「ふふん」

坂上「もう一本いいか」

次は槍を捌き、坂上が懐に入り込み面を寸止め。

坂上「三本目は……いつかやろう。腕は鈍っていないように、安心した」

十文字「俺に『剣士になれ』とは、どういうことよ？」

○夜、坂上道場内

だだっ広い道場に、一人立つ坂上。

壁に貼った相撲のチラシ。

辺りから、かつて道場が盛んだった頃の、竹刀の音、踏み込みの音が聞こえてくる。

しづが、薙刀(の竹刀)を持ってくる。

しづ「きつとまだ何か、お迷いになったらっしやるのね？」

坂上「よく分るな」

しづ「女房なので」

二人は竹刀と薙刀を構え、試合開始。

しづが坂上の突進を避け、右脛に一本。

しづ「足元がお緩いです」

坂上「もう一本」

しづが右脛にフェイントを入れる。

気を取られた坂上は、返しの面打ちにやられる。

坂上「もう一本」

何合かのち、やはり右脛に一本。

しづ「戦場なら、三度死んでます」

坂上「そうだ。だが、死なない所が、試合

の良さでもあるな。何度でもできる。相撲のようだ」

しづ 「どういうことですか？」

坂上 「剣の試合を、相撲のようにお客に見せてお金を取れないだろうか」

しづ 「……？」

坂上 「今私たちがやったことを、剣の興行とするのだ。駆け出し者から横綱まで番付をつけ、東の剣士と西の剣士に別れてな。竹刀と防具をそろえれば、怪我や死ぬこともない剣の試合を、皆で見物できる」

しづ 「……」

坂上 「どう思う？」

しづ 「なんて素敵な！ お相撲の、剣術版ですか」

坂上 「お客が集まり、木戸銭が集まれば、剣の腕を持て余している者たちに仕事を与えられる。客は喜ぶ。皆は食べる。そしてしづは楽しい。三方得ではないか？」

しづ 「素敵。なんて素敵なの」

坂上 「そうだろう」

しづ 「何より、あなたが笑っているのが素敵よ」

坂上 「(気づいていなかった) ……ん？

俺、笑っているか？」

しづ 「(うなづく) それでお金を稼げたら」

坂上 「稼げたら？」

しづ 「母屋を取り戻せますか？」

坂上 「…… (うなづく)」

○八染の遊郭、外観

おどろおどろしく派手な外観に、おそるおそる入っていく坂上。

○同、客間

八染 (60) 「そいつはなア、げつけんこう撃剣興行とい
うのさ！」

坂上 「撃剣興行？」

花魁たちを侍らせた、興行師八染。
全身入れ墨で、梅毒で落ちた鼻を金属
の鼻で覆っている。

八 染「打撃の撃に剣だ。『剣を撃つ』ってこ
とだな。『剣術』という言葉の使用は、明治
政府から禁止されただろ？ 武士の再興を
煽るってな。だから撃剣という言葉を編み
出して、興行にした奴が東京にいるのさ」

坂 上「東京に？」

八 染「知らなかったのか」

坂 上「（うなづく）」

八 染「それに気づいたのは、日本で二人目
ってことか！ 去年の春、両国りょうごく広小路ひろこうじ河川
敷でド派手にやりやがったアやつがいる。
それ以来、北辰ほくしん一刀流いっとうりゅうの二代目千葉周作ちばしゅうさくも、
神道無念流しんどうむねんりゅうの齋藤新太郎さいとうしんたろうも、我も我もと大
流行。だがあつという間に東京じゃあ禁止
されちまった」

坂 上「なぜ」

八 染「武士の復権を煽るってな」

坂 上「なるほど」

八 染「最初に始めた男の名は……そう、た
しか直心影流の榊原健吉」

坂 上「榊原どの！」

八 染「知ってるのか」

回想。貝の膏薬をくれた男。

八 染「今、そばは一杯いくらだ？」

坂 上「十文字の所だと、一杯一錢だな」

八 染「剣士は一日、三十錢もらえる」

坂 上「一日で！」

八 染「お客の木戸もんめ銭は一朱、そつから寺銭、
道具代、宣伝、それらを差っ引いてもまだ
儲るぞ。幸い、撃剣禁止は東京城内のお触
れよ。ここ神奈川県は……範、疇、外！」

八 染、身を乗り出す。

八 染「侍公債がアンタん所にあるだろ。そ
れを前払いの供託金として頂くぞ」

坂 上「そ、……それは我が家の最後の虎の
子……それがなくなったら路頭に迷ってし
まう」

八 染「今だって迷ってるようなもんだろ」
坂 上「……」

八 染「興行に失敗したら俺っちだつてこの
子ら売っ払わなきゃいかん。そうはいかね
えんだよ」

花魁の胸をつかむ八染。

いやあんと嬌声。

八 染「乗るか？ そるか？」

もう一方の手を出す八染。

坂 上「……乗る」

八 染「さすが侍、くそ度胸！」

二人、握手。

○坂上家、庭く道場内

十文字「頼もう！」

槍袋を抱えた十文字。

し づ「十文字さん！ いらっしやい！」

庭では、職人が看板を描いている。

『坂上撃剣会』と大書され、剣の絵が
描かれる。

坂 上「来たか！ 十文字！」

野 末「(両肩に刀を載せ)頼もう！ 丸目まるめ

蔵人直伝、タイ捨流しやの野末馬之助なり！」

坂 上「いつぞやの！」

野 末「(にやりと笑う)」

道場に入ると、満杯の剣士たちが竹刀
を打ちあっている。その中に弥一郎も
弥二郎も。稽古を見ている八染、坂上
にうなづく。

十文字、目を輝かせて腕まくり。

し づ「こんなに道場が賑やかなのは、いつ
以来でしょう」

坂 上「剣に生まれ、剣に生きると誓った者
が、ずっと腐り続けていた。だが死んでな
い。死んでないのだ」

十文字、しづ、うなづく。

○瓜生神社内、撃剣場

T 『初日』

どん、ど、どん。

どん、ど、どん。

太鼓が鳴る。

立札 『撃剣興行 坂上撃剣会』

朝から集まる客。入口は押すな押すな
の大騒ぎだ。観客を捌くのは、八染の
入れ墨若衆。

板間の上に勢ぞろいした剣士たちは、
剣道の防具に思い思いの竹刀を持つ。

中央の坂上、頭上に朱鞘の日本刀を掲
げ、抜く。きらめく白刃。

坂上 「これより坂上撃剣会の撃剣興行を、

開催いたす！ 侍の魂、その剣を、天地神
明に御覧あれい！」

× × ×

T 『下級剣士の試合』

すぐに決着がつくので盛り上がる。

審判の坂上 「白、面一本！」

行司の坂上が紅白の旗を上げ、勝った
方を示す。

入れ墨の若衆、客から番号の入った赤
札を回収、白札と現金を交換。

× × ×

T 『中級剣士の試合』

十文字が振り回す勇壮な槍に、観客は
圧倒される。

しづとの薙刀との試合に沸く。

弥二郎は相手の脇を取り、横にいなす
動きで変幻自在。

野末 「タイ捨流！ 野末馬之助也！」

地面をトントンと叩く異様な構え。

相手の竹刀を巻いて地面につけさせ、
その上に飛び乗って膝蹴りを喰らわせ、
大喝采を浴びる。

× × ×

T 『上級剣士の試合』

弥一郎の構えは隙がなく、相手もなか
なか動かない。

観客はざわざわし始める。

相手がじれて動いた瞬間に弥一郎は小さな動きで小手を決める。

坂上「赤、小手一本！」

観客1「え？ 今打ったの？」

観客2「どっちの勝ち？」

観客3「赤だって」

観客1「え？ 今打つとらんやろ」

観客3「バーン言うたやろ」

観客2「そうか？」

次の上級剣士の試合もにらみ合い。

小競り合いをしたかと思えばすぐ離れる。

観客1「……なんかつまらん」

まだにらみ合いは続く。

観客2「帰るか、そろそろ」

観客の中にいた八染、腕組みをする。

○夜、八染の遊郭、客間

坂上「剣とはそもそも動きが小さく、相手に悟られぬように打つものだ。分りやすいのはそもそも剣ではない！」

八染「だ、か、ら！ それじゃあ見世物にならねえつつつてんの！ 派手に、大きくやんねえとお客は分んねえだろ！ 勝ち負けが分んねえよ！」

坂上「だからそれは剣ではない！」

八染「だからそれは見世物じゃねえ！」

坂上「……」

八染「……」

八染、茶を飲み落ち着く。

八染「よし。取引だ。今日の所は譲ろう。明日はおめえさんの好きなようにやってみな。客が減ったら俺の言う事を聞け」

坂上「……相分かった」

○二日目、撃剣場

T 『二日目』

昨日より客が減っている。

不安に駆られる坂上。

× × ×

初級剣士の試合。

場外にはじき出されるなど派手な動きが多く、盛り上がる。

現金のやり取りも活発。

× × ×

中級剣士の試合。

野末が剣で地面を叩くと盛り上がる。

野末「キエエエエエエ！」

その奇声に観客は笑う。

しかしその奇声もろとも一本を取り、客はどよめく。

弥二郎の試合。

竹刀で地面を叩き、野末の真似。

弥二郎「キエエエエエエ！」

観客にどっと受ける。

× × ×

上級剣士の試合。

相変わらず弥一郎は地味ならみ合い。

観客は帰りはじめる。

× × ×

興行終了の太鼓。観客は数えるほど。

坂上「……」

○夜、八染の遊郭、客間

八染「これが昨日の上がり。これが今日の上がりだ」

畳の上に、昨日の稼ぎと、その半分以下になった今日の稼ぎを並べる。

八染「約束だ。派手にやれ」

坂上「……たとえば、野末がやった猿叫えんきょうか」

八染「エンキョウ？」

坂上「キエエエエエエと言った奴がおつたろ」

八染「いたな。あれは受けてた」

坂上「あれは薩摩の野太刀のだち自顕流じけんの猿叫」

猿が叫ぶと書く。剣術はふつう声を出さぬが、薩摩は叫ぶ」

八染「なんでだ。猿だからか」

坂上「大声を出すと力が入るだろ。よっこいしよとか。その大袈裟なものだ」
八染「変わったやり方だな」
坂上「彼らは初太刀に命を懸ける。受けられてもその刀ごと肉体を両断するつもりで打つ。だから初手から叫ぶ」
八染「でもそっちの方が分り易いな。客は受けるぞ」

脇の花魁に確認。彼女はうなづく。
八染「あと、勝敗がすぐわかりづれえな。速すぎて、どこを打ったのかすら見えねえよ。面打ったらメーン、胴打ったらドー、て言ってくんねえとよ」

坂上「そんな剣、見たことないぞ」
八染「剣であり、見世物だ」
坂上「……」

八染、花魁のキセルを借りて剣代わりに振る。

八染「メーン！ ドー！ 乳ー！」
花魁「いやーん」

八染「ホラ、分り易いじゃねえか！」
坂上にキセルを渡す。

坂上「(しどろしどろ小声で)メーン……」
八染「メーン！！！！」
坂上「メーン……」
八染「メーン！！！！」
坂上「(やけくそで)メーン！！！！」
八染「そうだよ！ それだ！」

坂上「メーン！」
八染「メーン！」
坂上「ドー！」
坂上「コテー！」
八染「ツキー！」
坂上「キエエエエエエエエ！」
八染「キエエエエエエエエ！」

○三日目、撃剣場

T 『三日目』

試合前の剣士たちの打ち合わせ。

弥一郎「本気ですか父上！ そんな色物みた
いな……！」

坂上「撃剣は剣術ではあるが、見世物でも
ある。素人が達人の剣を見切れるか？」

弥一郎「無理でしょう。だから剣なのです」

坂上「ならば言え。見えないものが、見え
たことになる」

弥一郎「……」

弥二郎「いいじゃん！ 俺、やってみるよ！

昨日のキエエエも受けたし。何やってるか
分らないより、やった方が分るだろ！」

× × ×

剣士1「おりやあああああああ！」

剣士2「むむむむむむむむむ！」

剣士1「どりやあああああ！」

剣を打つ。避ける剣士2。

剣士2「うおおおおおメーン！」

面を打つ。防ぐ剣士1。

剣士1「キエエエエエ！」

どつと笑う観客。

剣士2「キエエエエエ！」

観客1「キエエエエエ！」

観客2「キエエエエエ！」

剣士1「ドー！」

胴が一本入る。拍手する観客。

審判「白、胴一本！」

観客にまじって観察する坂上。

× × ×

野末「キエエエエエ！」

どつと沸く観客。いつの間にか客が増

えているのに坂上は気づく。

観客たち「キエエエエエ！」

観客1「あいつの試合は面白いな！」

観客2「昨日も面白かった！」

観客1「俺は初日から見とるで！」

相手の弥二郎も真似をする。

弥二郎「キエエエエエ！」

観客たち「キエエエエエ！」

弥二郎は皆の手を借り、手拍子を要求。

観客は乗る。手拍子はどんどん速くな
っていく。

弥二郎「ドー！」

一本を取り、観客は大喝采。

× × ×

観客の距離からは動きが小さすぎて何
をやっているか分からないことに気づ
く坂上。

剣士3「メーン！」

剣士4「ドー！」

審判「面胴相打ち！（旗を伏せる）」

剣士3「メーン！」

剣士4「ドー！」

審判「赤、胴一本！（旗を上げる）」

観客1「さっきのと今のとどう違うんや！

一緒やろ！」

観客2「最初のは相打ちで両方死ぬけど、二

回目のは一瞬胴のほうが速いから、先に死

ぬ、いうことやろ」

観客1「はえー、そんな一瞬で死ぬか生きる

かわるんか。見えんわ」

観客2「ワシもよう分らんけど、メーンドー

言うてくれるから、分るようなもんや」

観客1「なるほどー、見方が分ってきたぞ」

坂上「……」

○夜、八染の遊郭、客間

八染「今日の弥二郎どのの手拍子は、傑作
だったな！（真似をする）」

初日の上がり（中）、二日目の上がり

（小）、三日目の上がり（大）が積ま
れる。

坂上「一日中客席にいて理解した。そもそ

も剣は速く、動きは小さい。歌舞伎役者が

大見得を切る理由がわかったよ（歌舞伎役

者の真似）」

八染「やっとなわかって来やがったな？」

坂上「砂被りの桝席を作ろう。席料を高く
取るのだ」

八 染「お前天才か！」

坂 上「あと、花魁たちを借り出せると面白くなる」

八 染「？」

坂 上「幕間に、剣舞をさせるのさ」

八 染「ウチの子にそんな芸はねえぞ」

坂 上「構わぬ。振りだけしてくれ。どうせ客は太刀筋など分っていないことが分つた。乳や太腿しか見ぬだろう」

八 染「お前天才か」

坂 上「宣伝にも借り出せるか」

八 染「よし、まずは金算用だ」

八 染は三日分をまとめ、切り分ける。

八 染「これは剣士たちの分。三日で九十銭、三十五名」

半分ばかり取り分ける。

坂 上「これで皆、腹いっぱい食える」

八 染「寺銭、俺たちの取り分、宣伝費、

……アンタの取り分」

残りは二銭。

坂 上「そば二杯分。悪くない」

八 染「明日もやりてえ所だがよ、明日は神社の縁日だし、大からくりキカイ、軽業師の興行予定が入ってる。次やるとしたらひと月後だ。やるか？」

坂 上「……（うなづき、ふと腕を組む）」

八 染「どうした？」

坂 上「大からくりと言ったな。奇術か」

八 染「それが？」

坂 上「刀と鉄砲、どっちが強い？」

八 染「そんなもん子供でも分かるわ。鉄砲集めたら刀が敵うわけないだろ」

坂 上「刀のほうが強い、って見せたら、おもしろいよな？」

○市中の広場

どん、ど、どんと太鼓隊。

花魁たちが竹刀で剣舞をしながら、太腿をほだけ胸をチラ見せ、チラシを配

る。

坂上「撃剣興行！ 撃剣興行！ 次の撃剣は、明日より十五日間、瓜生神社撃剣場にて開催！」

剣士の数が五十名に増えている。

軽業師たちがハシゴに乗り、空からチラシをまく。

弥二郎「第二回は全国から本物の剣士たちを集めたぜ！ 宝蔵院流槍術、直心影流薙刀、江戸からは柳生新陰流、すね切りの柳剛流、薩摩からチエストーの示現流、千葉は北辰一刀流、壬生狼の天然理心流が大集結！ どの剣が強いかな？ 見てみるかい？」

しづ、鉄砲を構えて坂上に向ける。

坂上は朱鞘の日本刀を抜き、構える。

鉄砲、打つ（空砲）。

坂上「むん！」

切り下ろし、袖から出したまっぶたつの弾を地面に落とし、拾い、みなに見せる。

坂上「見よ！」

観客「おおおおお！」

坂上「武士の剣は、弾より強し！」

木の札に書かれた『坂上撃剣会』は裏返し、『弾切りの一座』に。

剣の絵も、剣が弾を真つ二つに切っている絵に変わる。

○瓜生神社、撃剣場

大筒から放たれる煙。

坂上は真つ向切り。後方で二つの爆炎。

観客のボルテージは最高潮。

○夜、十文字そば屋

八染「皆さん、第二回撃剣興行、十五日間怪我もなくお疲れ様でした！ 今夜は俺たちのおごりだ！ 朝まで飲もうぜ！」
うおおおとうなる剣士たち。

十文字「ウチのそばとつまみも、今夜はおごりだ！ 腹いっぱい食え！」

うおおおとうなる剣士たち。

八 染「あと、朝までウチの廓はやってつからいつでもどうぞ！ 撃剣の剣士といえば半額だ！」

うおおおとうなる、若い剣士たち。

坂上が乾杯の音頭を。

坂 上「皆にいい知らせがある。八染さんが、中山道や東海道の興行師に話を通して、地方を巡回興行出来るように計らってくれた。これから全国を廻るぞ！」

うおおおとうなる剣士たち。

坂 上「まだ見ぬ侍たちに会いに行こう。乾杯！」

全員「乾杯ー！」

○同、外

中ではどんちゃん騒ぎが続いている。

弥一郎が待っている。

坂上が来る。

坂 上「なんだ」

弥一郎「それは私の台詞です」

坂 上「……なんだ？」

弥一郎「……なんなんですか、あれは！」

坂 上「あれとは、……どれだ」

弥一郎「全部です！ 撃剣興行の全て！ あれは剣でもなんでもない！」

坂 上「うん。そうだ。撃剣は、剣そのものではない。剣と、興行の、合いの子だな」

弥一郎「剣の要素がどこにありますか！ あんな大道芸まがいのことまでやって！」

坂 上「客が集まれば、それだけ木戸銭が入るんだぞ。腹いっぱい食える事の何が悪い」

弥一郎「間違った剣で、何が面白いか！ メー、ドー、これから切る場所を言う愚者がどこにいますか！ 客を驚かせたり、騙すのは正しい剣ですか！」

坂 上「……では弥一郎。正しい剣とは何

だ？」

弥一郎「御奉公の為に振るい、敵を斬る剣です！」

坂上「……いいか。我らが仕えた藩はもうない。幕府は明治政府に城を明け渡したのだぞ？ 奉公すべき殿様も、戦うべき敵も、なくなってしまった」

弥一郎「では、明治政府がなくなればいい」

坂上「滅多なことを言うな。誰が聞いているかわからぬ」

弥一郎「……」

坂上「撃剣はしょせん方便だ。竹刀だって真剣の方便だろ。しばらくはこれで飯を食いつなぐしかあるまい」

弥一郎「しばらく、とはいつまで？」

坂上「……しばらくだ」

弥一郎「父上の約束は、時々その場をやりすごすだけのことがあります。私はずっと昔の約束でも覚えていて、父上がそれを叶えることを、今でも待っています」

坂上「……何だそれは。あ、坂上家伝家の宝刀を、いつかお前に譲る件か」

弥一郎「(首を振る)『剣は役に立つ』です」

坂上「……」

○地方巡業

どん、ど、どん。

どん、ど、どん。

チラシや日本地図がオーバークラップ。

チラシ『弾切りの一座 撃剣興行 於横浜』

チラシ『於静岡』

チラシ『於長野』

チラシ『於埼玉』

弾を切り、喝采を浴びる坂上。

子供たちが「キエエエ」や「メイン」や「ドー」の真似をする。

それを微笑んで見ている坂上。

剣士たちの激闘。

『満員御礼』の札止めが連日続く。

○東京、松尾米問屋、外観

T 『東京府・深川』

○同、内

杏 「ちよつと、権兵衛！ そこはそれじやない！」

住み込みの丁稚に指示を飛ばす。

杏 「計算尺の赤と緑を合わせて！ それで複利を一々計算する手間が省けるでしょう？」

そこへ、しづが訪ねてくる。

しづ 「……元氣そうじゃない」

杏 「母上！ あ、ちよつと待って、松尾を連れて来ます！ おーい、友則ー！」

奥へ走っていく。

× × ×

松尾 「あの……この度は、なんていえばいいんですかね、駆け落ちして、申し訳ありません。いずれ、正式にご挨拶しようと思っていました」

しづ 「悪い人じゃあなさそうね。そこであんみつ食べる時間はある？」

と、向いのあんみつ屋を示す。

○向いのあんみつ屋

テーブルに置かれた計算尺。

松尾 「杏が、つくったものです。彼女は頭がよく、数字に強く、そして気が利く。私が教えただけでめきめきと計算を覚え、相場や利子をたちどころに示す道具までつくってしまいました」

杏 「だってこうしたほうが簡単じゃない。私だけできても意味がないから、丁稚の子でも使えるように沢山つくったの！」

松尾 「これで、松尾問屋は大坂より早く出荷量を決められる」

杏 「女一人でも、ここ（頭）を使えば渡
っていける。それが新時代よ！」

しづ 「そう。（松尾に）……怒らないで頂戴
ね。杏の悪い所を教えて？」

杏 「は？ 母上、何を言い出すのよ？」

しづ、手で杏を制する。

しづ 「教えて下さる？」

松尾 「そう……ですネ。……まず、頑固だ。
言っても聞かないところがある。でもたい
てい杏のほう为正しくて、だからますます
胸を張ることがある。私はそれを、良くな
いところだと思っています」

しづ 「どうして？」

松尾 「世の中には間違った人のほうが多い
からです。商人は、全員に愛されなくては
ならない。正しいことが必ずしも通る世界
ではないです。それは世界が間違っている
と思います。しかし文句を言っても杏が嫌
われるだけで、何も生まれない。それを利
用しないとイケない」

しづ 「うん。……うん。御免なさいね。頑
固なところは私に似てるのね。それは御免
なさいね」

松尾 「あ、いや、そんなつもりは」

しづ 「いいのよ。あなたが正直な人かどう
か、試させてもらったんだから。良かった。
これで杏のいい所しか言わないのなら、力
づくでも連れて帰るつもりだったの」

松尾 「……」

杏 「母上も策士ね」

しづ 「あなたが受け継いでくれてよかった」
杏 「そう言えば、父上は撃剣興行を始め
たんですって？」

しづ 「ええ。大人気で、なんともうすぐ母
屋を取り戻せそうなの！ やっと家族であ
の家で暮らせるわ」

杏 「……あの、良くない評判のこと、御
存じ？」

しづ 「え？」

松尾 「かつていろいろな撃剣興行が、大流

行したんです。でもその時の新聞は、決して好意的ではなかった」

○問屋に戻って

奥から過去の新聞を持ってきた松尾。

新聞 『剣を見世物大道芸に墮とす』

新聞 『武は何処へ行ってしまったのか』

新聞 『鶏を絞め殺すが如き奇声を上げ』

杏 「この『鶏を絞め殺す』って？」

しづ 「キエエエエエ！」

杏 「何それ？」

しづ 「薩摩の猿叫。気合の一種だけど、派手で受けるし、みんな真似してる」

杏 「ジロ兄はよろこんでやりそう。イチ兄も？」

しづ 「あの子はやらない」

杏 「やっぱり！」

松尾 「この新聞の論調のおかげで、東京では撃剣興行は正しくない剣で、不当に人心を煽る大道芸だと見なされてしまった。私が見たことがないが、このせいでそういう偏見があります」

しづ 「正直にありがとう。座長に言っとくよ」

杏 「母上、いつでも遊びに来てください。

次はあんみつおごります」

しづ 「言うようになったね。私たちはしばらく旅に出るけど、次は座長連れてくるよ。二人を母屋に住ませたい、ってきつと言うはずさ」

○山梨の興行

今日も満員札止め。

十文字の槍と剣士の試合。

相撃ちのタイミングで槍と剣が交錯。

十文字 「むっ」

行司の坂上は、相撃ちを取る。

十文字 「坂上の。何を見ていた。向こうの打

ち込みが深く、俺は触っただけだ。真剣ならば俺は斬られた。負けだ」

だが坂上は旗を交差したまま。

坂上「規則では相打ちだ。開始線に戻って」
十文字「坂上！」

○長野の興行

軽い小手打ちで、弥一郎は一本を取られる。

弥一郎「威力不十分でしょ！ これしき、具足で守れる！」

十文字も納得がいかず立ち上がる。

坂上「そこまでは客も分らぬ。白、一本！」
弥一郎「私が一番分かっているというのに！」

○興行の撤収、夕

太鼓の音と、帰る客たち。

片付けをしている坂上に、十文字が。

十文字「坂上の、ちよっといいか」

坂上「……審判の件か」

十文字「あれはもういい。従った。それで終わりだ。地方巡業のこの旅も、今日でおしまいだろ。俺は今日限りでやめようと思つてな」

坂上「やめる？」

十文字「俺は一座を抜ける。俺一人なら勝手にいなくなったかも知れんが、俺に賛同する者が十人は下らぬので、座長に断りを入れてようと思つてな」

坂上「……何か、企みでも？」

十文字「(首を振る) この巡業で、ずいぶん地方の侍たちを仲間に加えられた。十人ごとき抜けても興行に響かんだろ。だから、ここらで潮時よ」

坂上「……大道芸剣法は、お前は反対か」
十文字「いや。剣術がそのまま廃れてしまうのを、お前は止めた。立派な侍の仕事だと思ふ。賛否あれど、俺は評価する」

坂上「では何故」

十文字「武士の本分を果たしに、九州へ向かいたい」

坂上「九州？」

十文字「……陸軍大将、西郷隆盛が挙兵する」

坂上「なんと！……ついに……ついに！」

十文字「そうだ。明治政府を相手取る戦だ。

勝てば、武士の世を再び取り戻せるかもしれない。俺はそこに参加したい」

坂上「……」

十文字「俺はそば屋でも芸人でもない。武士だ」

十文字のバックに、美しい夕日。

まるで落日を暗示しているような赤。

○夜、宿

布団を敷こうとしている坂上、しづ、

弥一郎、弥二郎。

弥一郎「父上、お話があります」

坂上「なんだ？」

弥一郎「私、十文字さんについて行きたいです」

坂上の手が止まる。

弥一郎「お聞きになっているでしょう。九州の件。私も、一兵卒を志願したく」

しづ「……」

弥二郎「兄上。兄上は、坂上家を継がなきゃいかんだろ。俺が代わりに行く。戦に出るのは、昔から次男からと決まってるだろ」

弥一郎「弥二郎」

弥二郎「俺も誘われたんだ、十文字さんに」

弥一郎「そうか……」

弥二郎「西国の武士たちが、続々と集まってるらしい。今こそ、時代をひっくり返せるぜ」

しづ「いけません」

坂上「しづ」

しづ「あ……あなたたちは、一座の中でも人気剣士です。興行に支障が出ます！」

弥一郎「興行など！ 私はもうメーンドーと
かもう嫌なんだ！」

弥二郎「俺は楽しかったよ？ イチ兄、一つ
頼み事聞いてくれない？」

弥一郎「なんだ」

弥二郎「伝家の宝刀、貸してよ。どうせイチ
兄のものになるんだろ？」

坂上「よかろう」

弥一郎「え？」

床の間に置いた朱鞘の宝刀の大小を、
二本とも弥二郎に託す。

坂上「本音を言えば、私も向かいたい。だ
が一座を守らねばならぬ。坂上家の魂を託
す」

弥二郎「……あ、じゃ、こっち（太刀）は興
行に使うでしょ。こっち（小太刀）を、守
り刀に借ります」

○翌朝、朝もやの中、二股の道

東へ向かう一座。

西へ別れる十文字、弥二郎、野末たち。

弥二郎、飛び切りの笑顔で、父がいつ
もやるように、朱の小太刀を掲げる。

○熊本、たばるざか田原坂の激闘

政府軍が鉄砲を斉射。

西郷軍も鉄砲隊で応戦。

銃弾が雨あられと飛び交う。

T&ナレ『西南戦争、明治十年。

明治政府七万対、西郷隆盛軍三万。弾薬三
千八百万発、一万三千人の命を消耗した。
あまりの銃弾の多さに、田原坂では弾同士
が正面衝突する「かち合い弾」が多数発生
したという』

空中でぶつかり、一体化して地面に落
ちる鉛弾たち。

× × ×

雨が降ってくる。

西郷軍の銃身が湿り、前込め棒も湿る。
傘の下でも鉄砲が火を吹かない。

西郷軍指揮官「白兵！ 前へ！」

弥二郎、野末たち抜刀。十文字は槍を。

西郷軍指揮官「突撃いいいい！」

雨と泥の中、弥二郎たちは政府軍の鉄
砲隊に切りかかり、壊滅させる。

新聞『田原坂の激闘』

新聞『官軍、警視庁の抜刀隊を投入、朝敵
西郷を追い詰める』

政府軍指揮官「抜刀隊、前へ！」

スラリと白刃を抜く抜刀隊。

雨と泥の中、抜刀隊と切り結ぶ弥二郎。

新聞『官軍、田原坂を制圧』

新聞『逆賊西郷、撤退』

○坂上家、庭

新聞『西郷自刃、城山籠城にて』

新聞を読んだ坂上、膝から崩れ落ちる。

○（後日）坂上家、母屋、客間

しづが使者を連れて客間へ。

廊下は家財道具で散らかっている。

しづ「（使者に）すみません、まだ母屋に引
越したばかりで散らかってまして……」

坂上、弥一郎が待つ。

使者、一礼して坂上の下座に座る。

使者「私、薩摩から恥ずかしくも落ち延び
て参りましたが。西郷殿と同じく腹を切らんと
思いましたが、殿は『最後まで生きよ』
と命じられました。そして『相模原の坂上
なる家を探し、届けよ』と、十文字なる者
にこれを託されました」

風呂敷包みを出す。

坂上「十文字なる者は」

使者「城山へ向かうと」

新聞記事。『西郷自刃、城山籠城にて』

坂上「……（ぎゅっと目を瞑る）」

使者、包みを解く。

しづ「ひっ」

穴だらけの朱鞘の小太刀。

銃痕でボロボロに穴が開いている。

坂上、抜く。刃も穴だらけで血の跡。

坂上「弥二郎。……お帰り」

弥一郎「……（悔し涙が止まらなくなる）」

坂上「感謝する。弥二郎を我が家に届けてくれて」

しづ、大泣きする。

坂上「（使者に）……少し、失礼する」

立ち上がり、縁側に正座。

穴だらけの小太刀を持つて。

坂上「弥一郎、失敗したら介錯を頼む」

弥一郎「えっ」

坂上は自分の鬚をつかみ、穴だらけの小太刀でぶつりと切る。

坂上「腐っても伝家の宝刀。よく切れるわ」
泣いている一家。

○（後日）坂上家、母屋、縁側

坂上、一人縁側に座り庭を眺めている。
思い出したように、手元の盆栽に鉢を入れる。

坂上「せっかく母屋を取り戻したのにな、しづ。杏も弥二郎もいなくて、ずいぶんと家が広いよ。風が吹き抜けてっちまう。なあ、しづ」

振り返っても誰もいない。

庭の向こうの道場からは、竹刀の音。

坂上「ああ。……朝稽古か……」

道場から、防具姿の弥一郎が。

（弥一郎は鬚を切らぬまま）

弥一郎「父上、下段の攻防のことで質問が」

坂上「弥一郎。お前は立派で、たくましくなっただなあ」

弥一郎「父上、質問が」

坂上「お前に教えることはもうないよ。全ては形の中にある。そうだ、一刀流坂上派

をお前に譲ろう。伝家の宝刀もお前のものだ。欲しがってたる」

弥一郎「は？」

坂上「座長もお前だ。弾切りの一座はお前に譲り、私は隠居するよ」

弥一郎「父上」

坂上「お前は派手なちんどん剣法に反対だったな。好きなようにしていいぞ」

弥一郎「父上」

坂上、盆栽を切る世界に戻る。

しづが道場の陰から見ている。

戻ってきた弥一郎、首を振る。

○長野、二股の道、朝もや

不穩。

弥二郎達と分れたあの道から、右腕のない、謎の天狗面の男がやってくる。

黒々とした気を纏いながら。

そのあとからついてくるのは、びっこを引いた者、眼帯をした片目の者、両目を失い杖をつく者、松葉杖の片足の者、身体の一部を失った者たち。

その中に、左目が義眼になり、左腕を失った野末も。

○八染の遊郭、客間

頭を下げている弥一郎。

八染「まあ、息子に坂上のが譲るって言うてんだ。アンタの好きなようにしろや。メ

ーン、ドー言わねえ、花魁も弾切りもねえ、渋い興行にすればいいさ」

弥一郎「(頭を上げ) 私は、ほんとうの剣をやりたい」

八染「うん。今回だけは昔のよしみで世話するよ？ ただしアンタのやり方でやるんなら、相模原じゃあ金輪際世話しねえ」

弥一郎「……(深く頭を下げる)」

八染「そのあと、地方を巡るつもりか」

弥一郎「そのつもりです。まだ埋もれている
武士は沢山いる。その者たちに会いたい」

○瓜生神社、撃剣場

『坂上撃剣会』の立て札に戻っている。

渋い顔で、客が続々帰っていく。

柱の陰から見ると八染。

八染「……（ため息）」

○坂上家、母屋、縁側

縁側で盆栽に鉢を入れる坂上に、薙刀
袋をもったしづが。

しづ「坂上撃剣会はしばらく旅に出ます。

弥一郎が心配なので、母として同行します」

坂上「うん」

しづ「しっかりお食べになって。そうすれ

ば気力も戻ってきます」

坂上「……弥二郎も十文字も、帰って来な

んだ。あいつらは、武士として死ねたかな」

しづ「……」

薙刀袋を置き、坂上の隣に座る。

しづ「やっぱり私はここに残ります。あな

たが心配です」

坂上「……」

しづ「弥二郎を失って悲しいのは、あなた

だけではないのですよ？」

坂上「……」

しづ「武士の世が終わって悲しいのは、あ

なただけではないのですよ？」

坂上「……」

つー、と涙が出てくる。

坂上「侍とは、なんだろうな。剣は、何の

為にあるんだろうか？」

しづ、坂上を抱きしめる。

坂上の涙は止まらない。

坂上「うわああああん。うわああああああん」

子供みたいに泣く。

しづは黙って抱きしめる。

○長野、中山道

坂上撃剣会、徒歩で移動中。
立ち止まる。
天狗面の男、輩たちと出会う。
風が吹く。

○野原

風が強く吹いている。
風の音で、人の声は遮られている。
弥一郎は、天狗面の男の話を聞いている。

天狗の面を外す男（観客に顔は見せない）。口元だけが見える。

戦争の傷跡で歪み、痛々しい。

驚く弥一郎。

弥一郎「そうですか。弥二郎は、冷たい雨の中、夜明けを待たず血の海で死にましたか」

泥と雨と血と夜明けのインサート。

うなづく天狗面の男。

その後ろの者たち。

○長野、撃剣興行

中央に鉄砲（当時の最新式スナイドル銃）が立ててある。

そこに朱鞘の太刀を持った弥一郎。

観客は満員。

後ろの剣士たちは不具の者たち。しかし防具はつけず、竹刀のみ。

弥一郎、一礼して。

弥一郎「坂上撃剣会は座長わたくし弥一郎に代わり、生まれ変わりました。これまでお客にも分りやすい剣をやってきましたが、これより本物の剣術をお見せするものになります。本物の剣とは何か？ それは『使える剣』であります」

弥一郎、抜きつけぎまに太刀を振る。

立ててあつた銃が、巻き藁のように真つ二つに。どよめく観客。

弥一郎「先の西南戦争。武士たちは刀をもつて雨の中政府軍を圧倒しました。それに対して政府が何をしましたか？ 鉄砲や大砲で殺したか？ 否！ 抜刀隊を編成、刀で刀に對抗したのです！ 遙か九州の地、天下分け目を担ったのは、銃ではなく、武士の魂の剣だったのです！」

太刀を見せて納刀する。

弥一郎「彼らは、その実戦の生き残りです」

義眼を外して見せる野末。

どよめく観客。

弥一郎「私たちは防具をういません。当たれば死、試合では激痛で動けない、剣の威力がわかるものになればと思います」

真つ二つのスナイドル銃。

弥一郎「西郷隆盛は銃に負けたのではない。刀の数が足りなかったから負けたのだ！」

『飛び入り大歓迎』の札。

剣士たちの歌「おう、おう、おう、おう。おう、おう、おう、おう、おう、おう」

不気味に吠える。

○同、防具なしの試合

面がまともに入り、相手は激痛で転がる。

小手が入り、相手は激痛で竹刀を落とす。

衝撃を受ける観客たち。

弥一郎、面を打ちまくり、相手が倒れるまでやる。

弥一郎「(天狗面の男を振り返る)」

天狗面の男「(うなづく)」

観客の中から、煤けた顔の猛者が三名。

『飛び入り歓迎』の札の前に立つ。

○太鼓橋を渡る一座

劍士たちの歌「おう、おう、おう、おう、おう、おう、おう、おう、おう、おう」

弥一郎、天狗面の男を先頭に歩く一座。
劍が銃を切った絵になった『鉄砲切り
の一座』という看板になっている。
一座は次々に数を増し、怪しげな風体
の男たちが増え、一大勢力へ。

○東京、松尾米問屋

弥一郎、店先に立つ。

弥一郎「杏」

杏 「イチ兄！ 旅に出たと聞きましたが」

弥一郎「(煤けた表情) 頼みたきことがある」

× × ×

もめる兄妹。

杏 「そんなことできないよ！ 何言っ
んの？」

弥一郎「お前は、弥二郎の無念が悔しくない
のか！ 父上を元気にしたくないのか！」

杏 「……」

弥一郎「知恵さえあれば、女一人でも世の中
を渡るんだろ？ それを見せてみろよ」

杏 「……」

○後日、松尾米問屋、内

伝票を繰る松尾。

松尾「ん？」

違和感を感じる。

松尾「(丁稚に) おい、伝票持ってこい。

ここ三月、……いや、半年分」

× × ×

大量の伝票を突き合せて確認する。

松尾「計算があわんど」

丁稚のもっている計算尺を借りようと。

その計算尺に、細工の跡がある。

○坂上家、母屋、縁側

縁側で盆栽をいじる坂上の前に、立つ松尾。

松尾「失礼します。本来ならばこの屋敷の敷居をまたぐ資格のない者です。正式にご挨拶してからお会いしたくありませんが、火急の事態につき、失礼つかまつります」

杏を連れてくるのに気づく。

坂上「杏。……それではお主は、杏の……」

杏「父上……御免なさい……御免なさい。」

あああああ！

涙をぼろぼろ落として謝る杏。

× × ×

細工された計算尺たち。

松尾「細工された計算尺で、差額をごまかした。これを作った者にしかできない細工です」

杏「差額のお金は……全部イチ兄に」

坂上「なにゆえ」

杏「刀を買うお金と」

坂上「なんだと？」

杏「坂上撃剣会は、西南戦争の続きをやるつもりなんです」

× × ×

回想。米問屋に来た弥一郎。

弥一郎「全国に不満を持つ武士が沢山眠っている。俺は彼らの目を覚ます。ほんとうの剣の名のもとに」

× × ×

杏「イチ兄は止められるの？ 父上、戦争なんて起こらないよね？」

× × ×

回想。弥一郎を遠くから観察している、天狗面の男。

× × ×

杏「イチ兄はきつとあの男に騙されていくのよ！ ぜったいそう！」

しづは黙っていたが、杏の肩を撫でる松尾に、杏への愛情を感じ取る。杏は松尾の手をぎゅっと握っていて、安心する。

杏 「坂上撃剣会はもう相模原に戻ってきて来ているのよ？ でも川向うの翔霍寺に泊まってる、この家にも帰らないつもりよ？」

坂上 「顔を見せればよいのに。親子だろう」

杏 「戦を起こそうとしてる人を息子と思える？」

坂上 「翔霍寺と言ったな」
立ち上がる坂上。

松尾 「その境内で、撃剣興行をやるそうです」

チラシを見せる松尾。

坂上 「川向うは八染さんのシマの外だ。そっちに拠点を移すのか」

○翔霍寺、境内

一座の者たち、出前の十文字そばを食べている。

弥一郎と天狗面の男。

天狗の面は置かれている。

(素顔はまだ見せない)

天狗面の男は右腕がないので、左手で器用に箸を使って食べている。

弥一郎 「器用なもんですね。左手でそばとは」

天狗面の男 「もう慣れたよ。最初はきつかったがな」

男の声は、怪我のせいかな異様なしわがれ声(以下【】で示す)。

弥一郎 「味が落ちたとはいえ、この辺では十文字そばが一番です」

天狗面の男 「……舌をやられてな。味はもう分らぬ。熱いか冷たいかすらも」

口元には爆発物でついた傷跡。

弥一郎 「……」

食べ終えた天狗面の男、面を被って立ち上がる。

天狗面の男 【少し、散歩をしてくる】

弥一郎 「よし、食べ終えた者から木刀を持って！」

× × ×

皆、木刀で組み稽古。
ぶん、という鈍い音が怖い。

弥一郎、門に坂上が現れたのに気づく。

○同、境内の裏

坂上「私は隠居した身だ。一座の方針に何かを言うつもりもない。だが妹を泣かすのは、良い兄ではないぞ」

弥一郎「父上は……人を殺したことがありますか？」

坂上「？」

弥一郎「私はありません。人を殺す為の剣を習って、それが生涯をかけた道だと信じて、なのに人を剣で殺したことがありますぬ」

坂上「人を殺めるだけが剣ではない。柳生宗矩むねのりどのは活人剣かつにんといって、人を生かすことも出来ると言った」

弥一郎「どうやって？ 人と人が対決して、殺さずしてその場を収めることができますか？」

思わず木刀を向ける弥一郎。

咄嗟に丸腰で手刀を構える坂上。

弥一郎「……丸腰では、剣の奥義も聞けませぬな。父上、坂上撃剣会は新しい興行の仕方を行います」

坂上「？」

弥一郎「防具なしの、木刀試合です」

坂上「危険だ。死人が出るぞ」

弥一郎「本物の剣よりは出んでしょう。腕が折ればコテーと言う必要もなく、鼻がもげればメンという必要もない」

坂上「それを防ぐために竹刀や防具が生まれたというのに」

弥一郎「人を殺さぬ剣は、ほんものの剣じゃない。父上は、人を殺したことがありますか？」

坂上「……」

弥一郎、そばを食い終わってスイカを食べる一座の連中の所へ戻る。

まだ切っていないスイカを木刀の一撃で粉々にする。
弥一郎の頬にへばりつくスイカの破片。赤い液体が流れる。

○後日、相模原、市中

五人の下級剣士が、剣道具を持って闊歩している。

道のもう一方から、同じく下級剣士が五人闊歩してくる。

道の真ん中でかち合う。

剣士1「道譲れや」

剣士A「そちらこそ」

剣士2「(道具を見て) 撃剣をやるのか。弱い剣士がデカイ顔しやがって」

剣士B「我々は今日東京から着いた所だが、神奈川に強い剣士がいるなんて聞いたことはないが？」

剣士1「ハア？」

剣士3「どこの道場だ！」

剣士A「したやくるまきか下谷車坂直心影流。榊原撃剣会の者だ。どうやら五対五と人数は合う。勝った者が道を通れるのはどうだ？(竹刀を構える)」

剣士4「いいだろうチンピラ！」

剣士D「どっちがチンピラだ！」

五対五の乱闘がはじまる。

○坂上家、縁側

切られたスイカを食べる坂上、杏、松尾、しづ。

坂上「スイカは包丁で切ったものに限る」
しづ「松尾さん、米問屋を留守にして大丈夫なの？」

松尾「そろそろ戻りたいところですが……」
と、表が騒がしい。
人々が走ってゆく。

町人1「喧嘩だ喧嘩だ！」

町人2 「撃剣会同士の喧嘩らしいぞ！」
坂上、木刀をもって立ち上がる。

○大乱闘

店先のものは壊すわ、川に放り込むわの大乱闘。

弥一郎を筆頭に、坂上撃剣会の面々が駆けつける。

坂上、しづ、杏、松尾も駆け付けた。

弥一郎「やめんか！ 辰！ 寅！ 捨も！」

若手が、乱闘している者を羽交絞めに。

もう一方にも榊原撃剣会の者たちが駆けつける。そのリーダー、榊原。

榊原「お前ら、市井の人々に迷惑をかけるな！」

弥一郎「は？ 我々は武士だ。ただの平民ではないぞ？」

榊原「……？」

坂上撃剣会の面々、木刀を構える。

それを見て、榊原撃剣会の面々も竹刀を構える。

榊原「(身内に) おい、やめろ。剣を下げよ！ (弥一郎に) うちの若い剣士が血気

盛んですまなかった。我々は榊原撃剣会の者。東京からここに興行に来たのでござる。

喧嘩に来たのではない」

弥一郎「丁度良い」

榊原「？」

弥一郎「私たちは坂上撃剣会。明日から翔鶴寺で興行だ。飛び入り大歓迎だが？」

榊原「ほう」

坂上「おや？ 榊原殿！ 榊原殿ではないか！」

榊原「？」

坂上、懐から貝の膏薬を取り出して見せる。

坂上「横浜の荷下ろしでは世話になり申した。鬻を切ったので分らんでしょうか。榊原殿の撃剣会でござったとは」

榊原「ああ。一刀流坂上派、坂上覚之進殿。
それでは……」

坂上「(弥一郎たちをさし)身内です」

弥一郎、二人が知り合いで戸惑う。

川に放り込まれた剣士5があがつてき
て、空気を読まずに乱闘の続きをしよ
うとする。

弥一郎「やめんか！(木刀をむける)」

坂上、ひとつアイデアを思いつく。

坂上「君たち！血気盛んな生きざま、剣
士として十分に良し！だが君らは剣を持
って生きる者だろう！剣を持って決める
がよい！」

剣士5「は？だからこれ(木刀)で……」

坂上「違う！どちらが強いか、試合で決
めようぞ！」

弥一郎「？」

榊原「？」

坂上「次の興行、撃剣会同士の対抗戦で、
いかがか！」

戸惑う弥一郎、榊原、剣士達。

榊原「対抗戦？」

○八染の遊郭、客間

八染「はっはっはっ。それでその場を収め
たどころか、俺っちにオモシレエ興行ネタ
まで持ってくるとは、傑作だなこりゃ！」

坂上、榊原。

八染「やっぱアンタ引退してんの勿体ねえ
ぜ！」

坂上の胸をどつく。

坂上「(榊原に)あの場を収める為とはいえ、
出まかせで言ってしまった。ご迷惑ではな
かったか」

榊原「なんのなんの、他流試合大いに結構。
地方巡業の理由は、まだ見ぬ剣に出会うこ
とでござる」

坂上「自分たちの一座に引き抜きでも？」

榊原「一座などという小さな器にはない。」

日本という大きな器に、引き抜くのでござる」

坂上「？」

榊原「拙者、警視庁の武術世話係を仰せつかった」

坂上「というと？」

榊原「先の西南戦争。抜刀隊の活躍が知られ、剣の強さが再評価されたのでござる。警視総監川路利良殿が剣の腕の立つ者を探し、警官として新たに雇うと計画しておられる」

坂上「警官は薩長出身で占められ、空席がないと聞いたが」

榊原「剣の腕さえあれば出自は問わぬ。全国を巡って埋もれた剣士を集めよ、となつた」

坂上「なんと！ ではあぶれた武士でも、腕を示せば警官という口があるかと？」

榊原「そうだ。拙者が見極め役」

坂上「……ああああああ！ あああああ！」

八染「話が見えねえな。どういこうこつたい」

坂上「八染さん、武士の行き所が見つかったんだよ！」

八染「？」

坂上「武士は、警官になるのだ！」

八染「警官に？」

坂上「そうだ！ こうしちゃおられん！

八染さん、お芝居の衣装で、警官の服とかないかな？」

八染「劇団に言えばあるだろ」

坂上「五十人分は？」

八染「そんなにはねえよ。どういことよ？」

坂上「坂上撃剣会五十名対榊原撃剣会五十名だろう？ 弥一郎たちは侍の恰好だから、対するこちらは警官の服を着せるのさ」

榊原「？」

坂上「勝てば警官になれる、って分かりやすい」

八染「ふむ」

坂上「それで興行名はこうだ。武士対警官。または……」

八染「または？」

坂上「武士軍対政府軍」

八染「西南戦争再び、って興行か！ いけるぞそれは！ やっぱアンタ興行師やんなよ！」

胸をどついてゲフンゲフンさせる。

○夕日の河原

榊原に頭を下げる坂上。

坂上「重ね重ね申し訳ない。警官の服をそちらに着せるなどと勢いで言ってしまった」

榊原「ははは。なあに、実戦通りに剣を振るう、いい経験になるでござる。面白そうではないか」

坂上「試合形式は、防具と竹刀でよろしいか？」

榊原「それ以外があると？」

坂上「坂上撃剣会は過激派でな。次の興行は防具なしの木刀で撃ち合うなどと言っている」

榊原「それは……下手したら死人が出る」

坂上「試合は試合、実戦は実戦、と分らぬ未熟者でな。そこで提案が一つある。私をそちらの大将として出してくれぬか？」

榊原「うちの大将？」

坂上「むこうの大将は弥一郎で、木刀を使うと言うだろう。私もそこに木刀で出る。その代わり他の者たちは全員防具あり竹刀で、となれば向こうも納得しよう」

榊原「皆はいいが、坂上殿が危険だ。一度引退したと聞く」

腰の木刀を抜く坂上。

坂上「生涯をかけて磨いた剣。負けるわけがない」

榊原「……では一手、ご教授願いたき事がある」

坂上「何を」

榊原「一刀流奥義の『切り落とし』を体験してみたい」

坂上「切り落とし」

榊原「こちらが面を打ち、そちらが面を打つ。なのにそちらが一方的に面を打てる術と聞く。そんな馬鹿な。奇術ではあるまい」

坂上「よからう。……こちらは寸止めするので、真っ向から面を打ってください」

榊原、腰の倭杖やまとつえ（特製木刀）を抜く。

坂上は青眼、榊原も相青眼。

夕日のシルエットで、構える二人。

榊原「……」

坂上「……」

榊原、面打ち。

坂上、同じタイミングで面打ち。

坂上の木刀の側面が、榊原の側面をこする。木刀の斜めの面（鎗から刃筋の間の「平地」の部分）でこする為、榊原の木刀が斜めに弾き出される。

ぴたりと榊原の頭上で止まる木刀。

弾かれて地面を打つ榊原の木刀。

榊原、驚く。

榊原「……失礼ながら、これほどの腕を持ちながら、何故こんな田舎に埋もれておられる」

坂上「たった今、見つけていただきました」

沈む夕日の最後の一瞬のきらめきが、

坂上を照らす。

榊原「……」

坂上「坂上撃剣会の皆も、同じく見つけてください（頭を下げる）」

○夜、坂上家、道場内

杏 「だからって、ウチが全部縫うことないじゃないの！」

道場に広げられた、五十着の警官の衣装。しづ、坂上、杏、松尾が縫い合わせている。

坂上「縫い手がないからしょうがないだ

ろ。傘張りで鍛えた我が手先が火を噴くぞ」
しづ「(覗いて) あなたの傘を買った人は、
さぞ雨漏りで困ったでしょうよ」

杏 「ほんとよ！」
しづ「松尾さんも付き合わせちゃってごめ
んなさいね」

松尾「ははは。裁縫は昔から得意です」
しづ「何か、松尾さんも家族になったみた
いで楽しいね。こういう夜なべもさ」

坂上「ひと段落したら、祝言をあげよう」
杏 「父上」

松尾「……(思わず杏と手を握る)」
神棚の、穴だらけの朱鞘の小太刀。
坂上「あとは長男が揃えば、全員集合だ」

○立て札

立て札『西南戦争再び、武士軍対政府軍

百人興行

神奈川県 鉄砲切りの一座

東京府 官許榊原撃剣会』

○瓜生神社、撃剣場

どん、ど、どん。

どん、ど、どん。

満場の客、太鼓、法螺貝、花魁剣舞。

客席に杏と松尾。桂少年も八染も。

鉄砲切りの一座はみな武士の恰好で、

竹刀と防具。弥一郎のみ木刀。

対する榊原撃剣会は警官の恰好に、竹

刀と防具。坂上のみ木刀。

中央の審判榊原が一礼。

榊原「相模原の皆々様、東京府からやって
参りました、榊原撃剣会です。強い剣士を
探しております。飛び入り大歓迎。我が一
座の者から一本でも取った者は、警視庁の
巡査に召し抱えます」

坂上「相模原の武士と近代政府、どちらが
強いかな？ 見てみたくなはないか？」

観客、どよめき、拍手。

坂上「九州でつけられなかった決着を、い

まこそこですてつけましょうぞ！」

どっと沸く観客。太鼓、法螺貝。

× × ×

『五十 対 五十』の札。

榊原「はじめ！」

第一試合、政府軍の勝ち。

『五十 対 四十九』に。

一進一退。

『四十 対 四十一』

『三十七 対 三十二』

野末の試合。

野末は片手剣法。

野末「キエエエエ！」

観客「キエエエエ！」

攻防の末、野末は上段から切り下すふ

りをして、左袖を振る。腕がないと思

っていたら、鉄球を仕込んでいた。

横面を殴り、ひるんだすきに胴一本。

榊原「胴一本！」

しづは警官の恰好で薙刀を振るう。

榊原「脛一本！」

『二十 対 十五』

合間合間に八染の若衆は掛け金を回収

しまくる。

『七 対 一』

残りは弥一郎一人。

榊原「大将戦のみ木刀試合とする」

弥一郎「私は防具なしで構わぬ」

榊原「……よかろう。許可する」

天狗面の男、弥一郎に竹刀を渡す。

弥一郎は鬼気迫る試合。防具の警官た

ちを圧倒する。

『六 対 一』

『五 対 一』

『四 対 一』

『三 対 一』

『二 対 一』

六人抜きを果たした弥一郎。

『一対一』

榊原「大将戦！坂上どの、前へ」

坂上。防具なしで木刀を持って立つ。

天狗面の男、弥一郎に木刀を渡し、耳打ちをする。うなづく弥一郎。

互いに木刀をむけあう坂上と弥一郎。

剣先が触れ合う。

弥一郎「剣で触れれば相手の考えていることが分る、と父上はおっしゃいました。私の考えることが分りますか？」

坂上「……恐怖しているな」

弥一郎「なに？」

坂上「自分が打たれ、死ぬかも知れぬ恐怖。

相手を打ち、殺すかもしれぬ恐怖。いずれもある」

弥一郎「……」

坂上「私もそうだからな」

弥一郎「……警官になることは、明治政府に寝返ることでは？」

坂上「……」

榊原「三本勝負！はじめ！」

探りあいから、弥一郎が怒濤の攻め。

一転、坂上が攻める。

剣と剣が交錯する刹那、低く避けた弥一郎は坂上の右脛を打つ。

榊原「脛あり、一本！」

坂上、膝をつけて痛みに苦しむ。

どよめく観客。

しづ、思わず坂上の元へ走る。

坂上「骨は生きてる。弥一郎は鍛え方が足りんな」

しづ「私が代わりたいくらいです」

坂上「息子を叱るのは、怖い父親の役目だろ」

榊原「二本目！」

右脛を打とうとする弥一郎、それを防

ぐ坂上、返す刀で横面を打つ弥一郎。

それを躲し、坂上は抜き胴を決める。

榊原「胴あり、一本！」

弥一郎「……！」

横腹の激痛に耐え、何度も深呼吸。

坂上「その天狗面の男。正体が分ったぞ」
天狗面の男【……】

坂上「俺の足元の弱点を指摘した者は天下に二人。一人は我が妻しづ。そしてもう一人は我が友、十文字真澄だ」

天狗面を外す、十文字。

傷だらけの貌、変わり果てた姿。

坂上「西郷殿の亡霊でも、演じたつもりか」
十文字【……武士の世を、もう一度だ】

坂上「武士はもういない。ぶっちゃけ、鉄砲の方が刀より強いだろ。弾切りなど奇術だろ」

十文字【では何のための剣だ？ 何のための武士だ？】

坂上「武士の正義は敵を切ること。たかが藩同士で切りあう時代は終わったのだ。日本という大きな藩になったのだからな。これからの武士の敵は悪人よ。町奉行は、もっと大きな日本奉行になるのだ」

十文字【……】

弥一郎「……」

榊原「はじめ！」

隙のない坂上の構えに焦る弥一郎。

剣だけがグイグイ前に出てくる感覚。

坂上、踏み込んで左肘、右足、右肩を次々に打つ。

坂上「ここも！ ここもここもここも！ はみ出しておる！ 人の道からはみ出しておる！」

弥一郎「あー！」

弥一郎は思わず真つ向上段から面打ち。

坂上も同じタイミングで面打ち。

空中で交錯した剣は、弥一郎の剣だけななめに弾かれ地面へ。

坂上の剣だけ弥一郎の面に下ろされ、寸止め。

雄たけびを上げる坂上。

坂上「あああああああああ！」

榊原「一刀流奥義、切り落とし一本！ こ

の勝負、政府軍の勝利と至す！」

太鼓が鳴り、法螺貝が鳴る。

どっと沸く観客。

若衆が掛札を回収にかかる。

互いに礼をする二人。

坂上が歩み寄る。

坂上「……私は人を殺したことがあるぞ」

弥一郎「……」

坂上「今、悪い息子を殺した。これからお

前は、新しい正義の人となるのだ」

弥一郎「明治政府が間違っていたら、どうしますか」

坂上「その時は正しいことをすればいい。

それを、一緒にやって欲しい」

弥一郎「……」

坂上「メーンも竹刀も弾切りも、剣も警官

も方便なんだ。その後ろにいる本体のお前

はどうするか、なんだよ。私はよく知って

いる。お前は正しいことを愛する者だ」

弥一郎「私は……私は、弥二郎が羨ましかつ

たのです」

坂上「？」

弥一郎「父上は、弥二郎を自分に似ていると

おっしゃった。私も、似ていると言われた

かったんです」

坂上「ははは。馬鹿だなあ」

坂上、弥一郎を抱きしめる。

坂上「正しさを愛するところが、俺そっくり

だぞ」

杏、松尾が駆け寄ってくる。

しづは、懐から穴だらけの小太刀を見

せる。

弥一郎、うなづく。

坂上、破顔一笑。

○警視庁、巡査教習所

T 『明治十二年 警視庁稽古場』

上座に榊原、十文字が座る。

師範代の坂上が、木刀を持って入って

くる。

坂上「さて、今日も警視庁名物の朝稽古だ。最近新参者も増えたので、改めて教えておくぞ。我が愛する妻が隣の食堂で皆の朝飯を作って待っているが、これを食べられる者はわずかだ。立ってられるような余裕はないから覚悟せよ」

巡查の中に弥一郎、野末。

坂上「なぜ稽古が厳しいか？ 簡単だ。悪より強くなる為。では構えて！」

何百人もの猛者が、思い思いの構えをとる。

坂上、ぴしりと青眼に構える。

坂上「面！」

全員「面！」

T 『撃剣興行は、生きた剣術を今に伝えるものとして、現代では評価されている』

(終)

【参考資料】

実録

- 「撃剣会始末」 石垣安造 島津書房 2000
「秩禄処分——明治維新と武家の解体」 落合弘樹 講談社学術文庫 2015
「日本剣豪譚——明治剣客伝」 戸部新十郎 毎日新聞社 1994
「埼玉武芸帖——江戸から明治へ」 山本邦夫 さきたま出版会 1981

小説

- 「撃剣興行」 長塚節 長塚節全集第二巻 春陽堂書店 1977 青空文庫 NDC914
「明治撃剣会」 津本陽 文藝春秋 1982

インターネット

- 見世物興行年表 明治六年四月、五月～七月
<http://blog.livedoor.jp/misemono/archive/s/>
Wikipedia 撃剣興行 榊原鍵吉 榊原撃剣会 西南戦争 西郷隆盛 明治六年の政変 廃刀令 警視庁撃剣世話係 警察剣道 警視流 日本の警察官 エンフィールド銃 スナイドル銃